ローレンス・アルマ＝タデマによる後期ヴィクトリア朝演劇の舞台美術

渡邉千華（京都大学）

本発表は、19 世紀後半、ヴィクトリア朝後期のイギリスで活動した画家ローレンス・アルマ＝タデマ（Lawrence Alma-Tadema, 1836-1912）が関わった舞台美術の仕事について、同時代文献の精査を通じてその実態を明らかにするものである。

アルマ＝タデマの絵画は、古代エジプト、ギリシャ、ローマなどの古代世界を考古学の知識を駆使しつつも、近代の観客に親しみやすく再現する工夫が特徴であり、ハリウッド映画がイメージを構想する際の参照元となったことが指摘されてきた。発表者はアルマ＝タデマ絵画に特有の大衆的な歴史画のイメージは、彼が舞台美術の仕事に携わったことに由来すると考え、アルマ＝タデマの絵画と舞台美術の相互影響を明確に示すことを最終的な目的として研究を進めている。その基盤として、アルマ＝タデマが制作に関わった全ての上演作品について、戯曲の原作、制作陣、画家の役割を確認する必要があると考えた。

アルマ＝タデマと演劇の関わりは Barrow, R. J. (2001). *Lawrence Alma-Tadema.*など主要先行研究において度々言及されてきた。後期ヴィクトリア朝演劇においては、審美的な効果を得るために美術家が舞台装置や衣装の監修・設計を行う習慣があった。その中でもアルマ＝タデマは頻繁に舞台美術の仕事を引き受け、1880 年から 1901 年の間に 13 の上演作品に協力した。うち 8 作品はシェイクスピア劇、4 作品は神話や歴史に基づく 19 世紀に執筆された戯曲、1 作品は古代ギリシャ悲劇の原語上演である。アルマ＝タデマの役割は、主に舞台装置と衣装への助言、あるいはそのデザインであった。画家はこれらの仕事を通じて著名な演劇人らと公私ともに交流を持った。

先行研究は画家の舞台美術の仕事を概観するが、個々の上演作品を時系列順に並べての考察は見られなかった。また一部の先行研究には上演作品の混同が見られたため、全ての上演作品について基本的な情報を改めて確認する必要がある。

発表者は先行研究を精査した上で、『エラ』など当時の新聞・雑誌記事や、フランク・ベンソンなど俳優の回想録といった文字資料、及び記事に付された複製版画や画家の素描、舞台写真などの画像資料を網羅的に収集した。

調査を通じて次の点が確認された。同時代の他の美術家も舞台美術に協力した事例が確認されるが、一人の画家がこれほど多くの舞台に関わった例は珍しく、卓越した空間構成力と考古学および歴史学的知識を有するアルマ＝タデマの能力が演劇界から要請されていたことが読み取れる。また画家が関わった多岐にわたる上演作品は、シェイクスピア劇、古代物のメロドラマ、古代ギリシャ劇の復古上演、古典を翻案した唯美主義演劇など、異なるジャンルが林立する同時代演劇の諸相を反映するものである。さらに、ベンソンやヘンリー・アーヴィングといった画家が共に仕事をした演劇人は革新的な演技・演出を試み、アルマ＝タデマは彼らの実験、ひいては同時代演劇の形成に貢献したと言える。